

(用語の解説)

【 牛 】

・牛流行熱等抗体検査

カ、ヌカカ等の吸血昆虫が媒介するアカバネ病、牛流行熱、イバラキ病、チュウザン病及びアイノウイルス感染症について、家畜伝染病予防法第5条の規定に基づく発生予防のための検査を、経時的に実施する。

・アカバネ病

妊娠牛が感染すると、感染時の胎齢によって流・早・死産、四肢の関節彎曲や脊柱彎曲などの体形異常、水無脳症（大脳欠損症）などの中枢神経異常を伴う先天的な奇形がみられる。

・牛流行熱

発症牛では突発的な発熱がみられるが、1～2日程度で回復することが多い。また、食欲低下、呼吸促拍、流涙、流涎、四肢の関節痛による歩行困難、乳量低下ないし泌乳停止などの症状を呈するが、解熱に伴って回復することが多い。

・イバラキ病

軽度の発熱とともに、食欲不振、流涙、結膜充血・浮腫、泡沫性流涎、重症例では鼻腔・口腔粘膜の充血・鬱血・潰瘍等がみられる。食道麻痺・咽喉頭麻痺・舌麻痺による嚥下障害がみられることもある。

・チュウザン病

異常子牛の出産が主徴で、流・早・死産は少ない。異常子牛にみられる症状は、自力哺乳不能、起立不能などの運動障害、間欠的なてんかん様発作等の神経症状である。眼球の混濁や盲目等がみられることもある。

・アイノウイルス感染症

妊娠牛が感染すると流・早・死産や異常子牛の出産が起こる。異常子牛にみられる症状は四肢の関節湾曲、斜頸、脊柱湾曲などの体形異常、起立困難、神経症状、盲目等である。

・牛白血病

EBL「地方病性牛白血病（成牛型）」と SBL「散発性牛白血病（胸腺型、子牛型、皮膚型）」がある。EBLの病原体は牛白血病ウイルス（BLV）であり、血液や乳汁を介して感染する。発症率は低いが、長い潜伏期間を経て発症すると、体表・体内のリンパ節、各臓器にリンパ球性の腫瘍が形成され、数週間から数か月で死亡する。

・牛海綿状脳症（BSE）

経口的に体内に侵入した異常プリオンが正常プリオンを異常プリオンに変えていくことにより、脳の神経細胞が死滅して空胞ができ、脳の組織がスポンジ状になる病気である。感染した牛は2～8年の潜伏期間の後、麻痺、起立不能、歩行困難などを呈し、死に至る。平成25年5月に、OIE（国際獣疫事務局）から「無視できる BSE リスクの国」に認定された。

- **牛ウイルス性下痢・粘膜病 (BVD-MD)**

牛ウイルス性下痢ウイルスの感染によって、発熱、下痢、呼吸器症状、粘膜のびらん等を呈する。成牛では感染しても無症状であることが多いが、妊娠牛が感染すると、感染時期によって流産や娩出子牛に虚弱、起立困難、盲目、内水頭症、小脳低形成・欠損、免疫寛容(持続感染牛：本病に対する抗体を作らない状態の牛で、終生ウイルスを排泄し感染源となる)が認められる。

- **ヨーネ病**

ヨーネ菌の経口感染によって起こる慢性の消化器感染症であり、長い潜伏期間(半年～数年)の後、持続性の下痢、栄養状態の悪化による消瘦等を起こし、やがて死に至る。感染牛の多くは無症状に経過するが、糞便中にヨーネ菌が排菌されることもある。

【 豚 】

- **豚熱 (CSF)**

全身性熱性疾患で、強い伝染力と高い致死率が特徴である。感染豚は、唾液や涙、糞便中にウイルスを排泄し、感染は、感染豚や汚染物品等の接触によりよる。典型的な症状はなく、発熱、うずくまりといった一般的な症状に始まる。さらに、結膜炎、便秘後下痢、後軀麻痺や運動失調、四肢の激しい痙縮等の神経症状、皮下出血による紫斑が見られ、重症例では死亡する。

- **アフリカ豚熱 (ASF)**

発熱や全身の出血性病変を特徴とする致死率の高い伝染病である。本病は、ダニの媒介や、感染畜等との直接的な接触により感染が拡大する。なお、本病に有効なワクチンや治療法はない。

- **オーエスキー病**

新生豚が感染した場合、嘔吐、下痢、神経症状を示して死亡し、致死率はほぼ 100%である。日齢とともに抵抗性を増し、肥育豚、成豚は無症状であることが多いが、食欲不振や呼吸器症状が認められることもある。妊娠豚が感染した場合、流早産や黒子、白子、虚弱子が娩出されることがある。一度感染すると、ウイルスは体内に保有され続け、ストレス等により発症したり、ウイルスを排泄して感染源になることがある。

本県では、平成 29 年 3 月をもって清浄化を達成した。

- **豚流行性下痢 (PED)**

黄色水様性下痢や嘔吐を主徴とするウイルス性の急性伝染病である。PED ウイルスは全ての日齢の豚に感染するが、哺乳豚では症状が重く、発病後 3～4 日で死亡することが多い。肥育豚、繁殖豚では死亡することはほとんどないが、水様性下痢や嘔吐のほかにも元気消失と食欲減退を起こすこともある。

- **豚繁殖・呼吸障害症候群 (PRRS)**

繁殖雌豚では妊娠後期の流・死産が特徴的で、産子は、正常・虚弱・白子・黒子が入り混じる。弱豚や哺乳豚では発熱と呼吸困難、肺炎等の呼吸障害を示すほか、免疫機能を低下させ、他の感染症に感染しやすくなったり、重症化させる。日本では、かつて、

腹式呼吸を呈する症状から「ヘコヘコ病」と呼ばれていた。

- **豚丹毒**

敗血症型、じん麻疹型、慢性型がある。敗血症型は急性熱性疾患で致死率が高い。じん麻疹型は、体表の発疹を認める。慢性型は疣状心内膜炎や関節炎を起こす。最近は、関節炎型がと畜場で発見されることが多くなっている。

【 鶏 】

- **高病原性鳥インフルエンザ**

鶏、あひる、七面鳥、うずら等が感染し、死亡率が高く、肉冠・肉垂のチアノーゼ、首曲がり等の神経症状、元気消失、呼吸器症状、消化器症状（下痢、食欲減退等）等を呈するが、無症状のまま大量死する場合が多い。鳥から鳥へ直接感染するだけでなく、水、排泄物等を介しても感染する。

- **ニューカッスル病**

免疫状態・健康状態によって病気の程度は様々だが、緑色水様性下痢、呼吸器症状（軽度～重度）、脚・翼の麻痺及び頸部捻転などの神経症状を呈する。

病原性の違いにより、高病原性のものは法定伝染病、低病原性のものは届出伝染病に区分される。

【 めん羊 】

- **伝達性海綿状脳症(TSE)**

BSE と同様、異常プリオンを病原とする。歩様異常などの運動失調、摂食行動の異常などを認める。数週間から数か月の経過で進行して、起立不能に陥り、死亡する。